「フィクションの力を信じて」

滝高等学校　竹内咲弥

「ドラマで社会は変わるのか。」

私は以前まで、ドラマはただ楽しむだけのものだと思っていました。面白い物語に夢中になり、登場人物に感情移入する。ドラマの価値はそれだけだと考えていました。しかし、一つの作品との出会いが、その考えを大きく変えました。

みなさんは「フェンス」という作品をご存じでしょうか。この作品は連続性的暴行時件の真相解明に二人の女性が立ち向かう物語です。私は見始めた当初はよくあるサスペンスドラマのようにハラハラしながら見ていました。ところが物語が進むにつれ、米兵による性暴力、沖縄戦の記憶継承、ミックスルーツの人への差別、米軍基地問題など、沖縄の抱える様々な課題が描かれていきました。主人公たちがその現実に向き合う姿は強く心に残っています。

私はそれまで、沖縄の問題について深く考えたことはありませんでした。しかしこの作品を見た後、自分でも関連する記事を読んだり、ニュースに注目したりするようになりました。一つのドラマが、私の関心の向かう先を変えたのです。

社会問題は、当事者以外の人にとっては難しく感じられたり、「自分には関係ないこと」だと思われたりしがちです。だからこそ、多くの人に関心を持ってもらうことが難しいという側面があります。しかし「フェンス」には、社会問題を扱いながらも、一つのドラマとして人を惹きつける力がありました。私はそこには大きな衝撃を受けました。

ドラマの力は、知らない世界を見せることだけではありません。「自分には関係ない」と思っていた問題を、「知りたい」「考えたい」という問題へと変える力があるのです。私はそのように人の心を動かし、社会へ目を向けるきっかけをつくる作品を届ける側になりたいと思うようになりました。

しかし、今のテレビを取り巻く環境は大きく変化しています。動画配信サービスの普及によって、人々の視聴スタイルは多様化しました。そもそもドラマを見ない人も増えています。それでも私は、ドラマが持つ力が変わることはないと信じています。

大切なのは、どのようにすれば作品を必要としている人や、まだその問題を知らない人へ届けられるのかを考えることです。良い作品は、作っただけでは社会を動かせません。誰かに届いて初めて、人の心を動かすことができます。だから私は物語を作るだけではなく、作品を社会へどう届けるかまで考えたいのです。

そのために私は、企画、制作、発信の全体に関わるプロデューサーを目指しています。どのようなテーマを扱うのか。誰に届けるのか。どのような形で発信するのか。作品と社会をつなぐ役割を担いたいと考えています。

ただし、社会問題を扱う上で忘れてはならないことがあります。それは当事者への想像力です。注目を集めることだけを目的にしてしまえば、その問題の中で苦しんでいる人々の思いを置き去りにしてしまうかもしれません。私は社会問題を単なる題材として消費するのではなく、その背景にいる人々の声や思いに誠実に向き合いたいと思います。

プロデューサーになるという夢を実現するためには、ドラマが好きという気持ちだけでは足りません。大学では映画論や映像表現について学び、映像作品が人や社会に与える影響についても理解を深めていきます。また、ニュースなどで大きく取り上げ

られている問題だけでなく、多くの人に知られていない問題にも目を向け当事者の気持ちや立場に寄り添うことのできる人になるために、沢山の人と関わる経験を通じて物事を一つの視点だけで判断しない力を養います。

　そして将来は、一人でも多くの人が社会を知り、考え行動するきっかけとなる作品を届けるプロデューサーになります。私は、フィクションの力を信じています。